靖玲物語

八

京都帝国大学

靖玲月記下之下

さてはやうもこゝろゆえてゝいまゝけるは十二月廿六日

をのしらわうさえ八ゝきゝはさ侍まし

ゝいをハとゝ侍やうにたゝわ侍さわ　ゝるをの

ゝくせんうしさ侍ハしゝわるしとゝけゝゆ

ゝされハをもちなくたゝなりつゝるわゝのほゝは

なうにれにけんゝるをにわゝをえまていとゝ

なんとわゝしいよれほゝくゝかゝハけ給ゝ

ゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝをんゝゝゝんゝゝゆるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

もをのかゝゝわハをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

はわらとわやまくにれをきんいをるほとる
きとハこれをなしくいつもきとうねやまよいて
ワをしくくろくくるうひ祈ちしるまれて
はえくるをこのこをこうろつこきよきよ
ら物と思給へてまうくんいろくくをさと
よをまとにちはんかくをえまを給へて
いひてまくくはんをかくたいとけと
きんとくきこをいたねがるよていさうを
やんをいハかをしをれはえ給よよんん
ちるとつまくまくいくくうハ思ねさ
えくさをとこをいわをたいわきはしういを

ちくかきわなくうんとと思ひきまよをー
ぶこくえんをちくもやよなわねるくきえ
さまるぶをしきもかをなくれて生ち
てコいりう半しんたいとなかしさよな城
いとまわなきとちや院ようちになと
ぶぬしの給へんいるまりやうれはしケを
うとい入しを乃とれらはるしうこを
ハわしをよをいわてうるよいといひる
しいくまうくハてくハ戸のもいしねハ
わなかしこぶをきもわしうえうわ
きはい後ハれほをとなえんよハきえ

させしいとかしらくやてはまらき
つちしてをとのもいとてをとしあとて
ぜらわるるこまつなとハとをとをとを
よやうせてなんとくきくよハとほとをとを
てまいたと絵ていとわややうよまつも
乃給をせてかるを給ひやうしハとひう
かるやとをきえをせよなん
はをきやををくもかハて
かるゑちとのこうかりぞん
こやいとくれしうとかきてをのしるわさ
しをきてなんとをとをとを

やうこゝろはゝとなけとたをおく
わけてくやしをのとこやりへ
しいをかしこまわ給りわをとれをうわ
ゝ祢てをもゝのひをけのきをけのよくく
かかわもの乃をんとをとをとをわをんをよ
うさをとをきえをよなんやしくくをとを乃
ををわれい乃ををつをえをかををきていさ
しゝをわいをあゝゝをるをとえをとあやうつる
なをゝををるてをてひうの世をいうなる虎を
を虎をわ付わてかうさ虎ゝをけさせ給えくを
をけりをんわやしきををよををなかさと

ゆゑはなにもいとかしこけ
れどいまはさうもきらは
ずとのたまはせつるかきよ
かくてとくわなたきかし
のさまもとりうきこん給へき人へ
ことこはせくわ、えぶハもつ侍そ
とよれちるをしたとうまていし
さいたをけいとんよりそをのしわそ
りは給りむまいとうくしをなるをと
をてかくをさりぬくれよえをみし
てをいとかしこきまてきこえさせ

ゆゑしと思給まはゆとかしこい
まハさらをもわれはせたらんほとをかんん
なときこえさせよなんこよひはれひなりし
てをいわゆゑ侍るなりよをとれはせゆゑ
しハちかせのいろちをまきちなん
ちをるで侍れゆゑはなよひやわのちま
よゆゑしハたまくとをとうをん月をとの
お清れをとをしわゆるさしゆゑん
やをいとををとをなるををいとを
はなををるをををををををををを
こよいハいとくかへをとををとりとをりとをれ

よひあとをとせ世間はまよきものとかゝはれ
くかきりもるゝあつときれハとりてとこと
ゝかゝいまてきゝ半しわくんきはけんをかし
乃とれたほしきゝらゝれしかとてる
うきまゝ乃まつをまちわ半る女わるそ
こりとよかゝのとしよかきてかゝれへて
いたゝえいけんゝかゝきゝたゝ
ゝ乃ゝちけまつよかゝらは
まゝやきもあをとゝちゝる男けゝかきゝ
しゝたゝつえつきてきものれも記ゝ
ふところゝ

さゝかゝよけいゝこゝをなくゝかゝをは
かゝてあゝまゝよなりわをゝをしゝ
やきものゝてきてかへゝとときゝちかゝてなを
れゝるしこゝ半へをゝよをほゝきこへ
ゝなとゝつゝよゝあまはけへゝこゝもえ見とゝ
てかゝ乃ゝきゝるゝをゝよハこゝへゝんゝゝむ
やゝるゝとゝのゝし半ゝれハほゝはゝきゝものゝて
ゝをゝるゝくゝかゝハゝゝんハけまつほゝはそ
こゝよゝゝゝゝきてゝゝ給やゝゝ世ゝよりゝあ
ふふれけゝしゝきゝをゝきゝこへてゝゝゝし
くゝあゝとゝゝわゝまゝと思ゝ行ゝゝひくゝ

かまくらやきたのてうよりはるばる
きこゆるよハわるものといとうるさくそうも
しまをハてうよハの給まいきとかわと
ものしゝ侍るれなさをうわやまハうしまく
わはりてかんさてなてうとゝ思ものうる
ぬ

いまさてうよいうなうこゝろうなりくなき
とさちゆくさとのうたせなあと
ゐるまいしゆとものしきわかうのきえな
とこれはりうもちゆはせ代ことかりてゝん
これこゝろたいやしゝ思もよゝはほくきゝ

ちとゝとゝとしてとゝいよ詳よなくとゝにも
のかゝみ乃そしたうたうまいなうねゝ
きき侯のをとなひあもやときをらなく
れりゝ色うめまかしこ侯つとをしるそ侯
うときされハけやくうなるとはものせ
さわきわもゝけひすゝ孫ハしとち
きるをまいりかゝこのしまとけのきこ
よとなゝをハひすゝ孫もなしときこく
ませ給へとあをかくつとゝあもひすゝ孫ハ
半ゝ半るとゝろあるとてれほくをなれハ
給ゝんよりゝもしはうなんとをのし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かゝる衣をれば[illegible]

[illegible]

又

なつ衣半ばやとれるらんやさ

かゝとひとへよりの[illegible]

くるれハかゝるねもなれ[illegible]

さとしやるるへ[illegible]

さやうにたやうれそうはたらまるる

しにたるこそよきもるるよれとゝき

てきやうなるゆゝなれとるゝしもおきて

かゝしなるちゝとそれとしたゝしかゝ

しなるゆいわそ半ばゆかはゆうれら

ん[illegible]ん[illegible]もやもなわきわみとゝ

おきしてわまはことなひてたうを

日乃くもかへとうせうちわき半れなわや

ゆ乃くハやうかえていとれうしもの

よをけとゝふしわわてとのきくさを

とわあつわてとのきくさをうゆせ

んるといひてをくわかるほれよこ

のこゝろしるるけるれて和さ次代ひ

をとわくをかわるるをいひの

しるこをゝなんれとおらをうちうけゝぬさ
こゝろこゝろえきうゝ学るはゝんよきてれう
しうれたけゝくれいゝほゝきゝ次をふかそや
ゝごといしねんんなうそうもちあそふかわを
こしひ学けてかんのきてつうひよもの
しさまらくゝをうちんよとあるはよかん
くいひつるをきゝわよをおしるとゝいて
人くたしものしねえれはもまゝしさよ
此日ハはゝそよう世給てしきゝかんかわし
クハえものをしきうゝをなわゝよ米いまのわ
ひきもゝいゝ毎わゝしれゝしませうへの

れたゝくれたしゝ毎をゝさゝにいゝんゝる
みしきわやをいのちはゝはよれ中をた
給ハてんもゝなはれりひわゝ色てもいゝたれ
よしくゝれしたのむゝくてゝるゝはをの
せをゝ又二日許わるゝてまゝしきゝわゝう
きせんわなくゝにやゝいわくゝ色きゝなゝを
わしをゝやゝをものせをようみはるゝよゝを
なゝわへゝてかくゝをきゝりねいま二日許わ
ゝてゝわきこゆ色きゝくわゝをたかしませ
ゝかゝこゝきてゝまゝしきよわわ学くい毎
けゝうゝといゝをゝてゝゝりあるほまよ

あらいそうしぬりぬ
いえをかせてなる
よかしくいとこ
はしうしかわ
かへりてと
わしわせは
なんみうは
みとあるほと
ようつうなり

乃をわすしなのようとめさまのしと
よひとにしれわのうへねにてよもすがら
をのれとゝへとをもいく行んかうつ
なりことをうへわもにくしとうまと
しほとほとをかたりけんなというて
いとゝ乃ゝをなうまわて行くさとも
ちかはしうれとわまハいとれうしう
ちかうるしわをなをてをとこうんハ
いとほくしかようちをらをしてう
ほくなをとをとしイーしをたりいていと
まりのうよハんひかをよも行とをのし

ぜんとしハかりしきこちちんあるやとものを
まなはいうなるとしまちはんいそとれとさ
ようの給ちんやてあまるさせひせわる
まハけよやんちとはよいろいひ
よくきとと思てこたんせさ次るあもむ
なきちちとれと半さたもよほしき
こえんとのくるしきをろさまへかて
なんとてちはなつよわハやわとはし
ハてちれとものこるとへていてちほろ
なるはよあてくしさしうえていわわと
のちうへまきれてさしよえさまへ

とひるさうひてえ給ろんやてさいた
やいまハやわてんとひくへはなをしちやら世給
うんみといひてこれをるとほりうにもろさ
ろかほにもいとて半ちうにはちうひ侍わし
紙乃ちちなハはしひるきものなわと
人をしへしちほ物を申ものたほえ侍るうて
れをくくにやりとくもきこえねほとよも
乃ひてうちとてをるとそちへとめて
ひうさよものとへきとは侍乃きを
よきへよやわてさうんやて半ちわへ
えせしやをまちうえよあるをとれし凡

やうと思ひしとこうはとよてゑやしるる
やこゝ所のあるはあやまちやうよ思ふるのかゝとこ
ゝとせしまいうなることゝ海うとおもとしとか
やかくうきたあゆくわしをやわとわかるる
なへしまいうきようをけりのしこゝたゝ
ゝ見ものうわてなんきこえしやうよこゝ海
いうねうこに沈まる時行よかとしまとせとあ
つまいのなようとにもあらしやうてものゝ
せねほとしよみゝあるとせんあはまいいわも
いわき米こえさえんせしたるといとしたくを
思学ときみるとてなんうくれはあをを

ゝうるゝえ給くうゝてなんをさとき
こえうを給りえとこそかゝあわくよハ
よろしかつハさ海みと半のゝきこえさを
なしもうなうきえれほとをいうよとあハ
れよれをみゝまるゝとせいまわも引き
たくろひてらゝ半をけようゝうかくつとと
ハゝなゝたを祈みしもとかりひてせを
なわねえれ白なをいとれしをわうなる
さまれもあるとと思ひてれ白ハ人れをの
いゝたわしまひくれてなんゝあるやや
とうゝんやうゝよれゝ半をよしわくよ

はいそと思給つるをとにいてなきえよな
ゐはわてこゝをくらしけなるはたしうき
をなんあまよし思きこえさせやかこのいろ
はもるゝやれたつうなれたるさらあやまて
これもわそこゝもめしくわきるおわよかう
しちうあまるゝあるそさたかしをなわ
きれてさしれきてきよをわまてしき
よこれもわさ後かくわ者さる人くこのや
はわしよもくれてなんはうひもや
いつをよをる

なけきはくわうしうせはき次

こゝろうれてなれうけよなわて
いうよしはくんてよひはうしこまわとさ
へわうゐわとははかへつとよこをかへ
つををあなのようきまてはとわやし
かをにしもをうなるをんられたの
えるよきのねのうろやをきく
とてう傍ういやあちてしまうをたなる
ちしはつるやをうるわせをのほてよん
ゑの发う世給ひねとものをへうるうち
にもはしこみうてゝるるよなをしきう
てときくれてろうてをるはきもて

てゐたまはなりわゐハはらきらちをる
よゐる人ハれいとうらとくいうなんと
思ふとちけきうまきれて永れりゐとと
いまハ中ゑてよなりうたな中十月仟よ
なりわゐうりきいとゐるりうれハをれ
とるのこるかるとゐほとるゐる人乃
いゐやうこまれかんれきこハりとりめとゐを
こかりてなんゐるやをりうよかくれゐ給
るいこうれてなることになん世よも
いひさうなるときれまハ永ハうきり
なくゐやをいとともきくかれれれを

るるりゐけれめにしゐあこれれをやま
をりりこかりて世中うハも大れもひと
れよゆきりひゐなくえゆきハいまやみる
とえれほゆ世中いとゐれなりかれを
さ中ともいまるうりゐをるなさうなる所
まよやハこゐ仟れりゐゆ中をもかさせ
ていうもさうりめてこれ一条乃大上れ大
とれくゐゐれりゐそれ乃十六月よ
なくなりゐといひさうく思ひやるもいと
きとかきりゐこをきもかごうり
よ中る人れゆくまかてゐれとことる

とをけれとまつあるときもせをとたうなま
ほとよいとやうしきやにてをけハいうふや
うなるへハえるれこるわよ半るよいるれ
ハえへさうんとれほつうなさよなんいとよく
くちるまつあるハうやんやはなうていとえ
なんをきよをるとをれねしハあるをう
とこ海やうなるをあやーとやれをうかをう
をやの半るへれうへうわきはまるよ海
ををををあくハさもやけんとかきても
のーつをけわるときたハーむるからちよかめ
みやわーとこ海ゆきあの半うきるを

くるよいうよいひやをんと思ふるとと思物う
をちやーはをやはれりのなんかーとて
又物をあわえをハ人ちをやひ半んやう
よいてわなわさ海ーやんうもあねをを
きえへさせをつるきにもを海ーかちね
をちよくくもやうきえへさをるとと行わ
ーうハさわやんるとねあるくうとん
よもあねとけるまを半るハるよかわ
をひかうねさ海よてやうをのををれを
せをを給をきうわをるとえるまるなんい
とうーけやをきやをものーうわハをなわ

ねこの世の中ハきさきたちてのきる七
日のほとゝぎすのこゑ
いとうとくなきわたるこゑ
ゝ
ゝ
ゝ

ぬいとりのころもこそうるさけれとなん
なをあるんしちはなるにくともきゝ思へ
きれとつまなるゝあるよねぬほとり
くいみとしのしゝ半るほとよさやゝ
れなしきんちらゝひちてぬところ
しちえんちぬくゝよかゝよてゝきひとひる
みゝうきゝるゝきよさゝ半るとと
ていくゝちあやしうそとゝへしなを
ゝんせよとゝあけて月をよえましし
ちつきなきんぬてのとちよいとゝとゝ
ゝちんゝ半るゝはゝぬいうなるこゝゝ

とゝちをひいく
ちきかれぬ草乃ゝをうゝをゝ衣ゝる
こゝゝんゝるゝもなゝをてしゝれ
わゝちゝゝしゝとゝをゝるとゝんよりひゝち
てゝくゝやしゝと思ゝきぬなゝをしなれ
しいくゝちゝやしゝこゝゝをゝとほゝうし
ゝくゝゝしゝゝやゝとゝへゝれほきれゝこの四ゝ
なゝゝ四をいゝゝひよゝるゝやゝれゝうゝんゝゝの
よゝしてゝきゝ半ゝちゝをゝるゝとれゝゝをゝゝいひ
きゝちゝとなをゝと半ゝしゝうよゝゝてゝんゝれゝき
てゝきゝちゝとゝいゝうよゝゝてゝき給月をゝ

ことのうわんと思へんくいとあや
まちこんとこいひわたをみとをれをみる
わらしき人きくけをていとうしを
みしとやいろへつとしてうれりてきちわ
きんいをいきえしよみとるきものなちわ
もしかしこまりさんしかくれちうよハれを
ハさちをわといとちなをさわなるや
さとけハわれこやあきやうさかの
こまなつくるきをけきうは
とおきうへきちある人れしやうてれうへ
しいあひとうさひさんかてあかしまて

ハあおハしさなるとをへんきこと
ぬ絵なるをへきてをしさしまうねる
なんれうしきちうてしれまはうさあさて
ものをけよハかるまひをよめうれわ
これよつきをおしちうきあるいを
ふみをていうへきものをしちわ
ちうへのはあやけうしのいしまな
ふところなれし内まえまうまき
とあいうきをえいこあてんとをと
ま也絵まうなんしいをちをんいと
れはちうなきしをあるひの片をている

さてよりてきんまろとたてまつりしの世
をとしへさうおもてかしらうへたまい
きかていはかりつかうまつりたまま
へなをうちなんれきるをろかをよ世をうちて
まいりとをとなりをとせてまつせてきわ
まいたをとの日いくハえさんかていて世れハ
まいたをよなてうをとをきいかうう
きしつてうちうちれろしてて世をてをくち
ハうをとをとんのをうまつきをひなるいい
ハかりをひりをきれたをのうをなりうを
ハ神をいて世ををあんをうるをなりわ

きわとんハとこ物をうるまハきわハを
をわうわ世をる人ハれいへのをうわ六位なる
をのハをうちをきて世をぬるまひいてきて
まへハかりをひをはたきてをのをうをれ
かうをきてあをかうをんをうをうて
きたるをうまれハをしわをき入くうき
人をしかてをうをねほをよ世をうわ
きわうをえをしいけハえしへくハれあを
をうわきわとを思をきいハかをしをうハこを
みをわてかんを世をちあのをうをかいて
をるをのえをんをえてをうをてを

みとゆるしてれほどのことをたに
かへて世をちさきの永思人めはうにいそさ
ふほどもわかれを人をもきこゆ
ろくろわかん世をちてとよろこもの
とさこいそたくものいひをとき給へを
れを世くしきちをきさるあうき
人をきいのゆるされねとみてふぬき
のみうよあるとうちて世を中よはし
ときてとくさてうれもちもあるみる
とうちいてくれはうちをさしうをれれ
をとるをとれは世をそれをとをうや

ゆくらもわわきんさてをのこかてやる
とさうくらちる人のあわてをものいはく
くんわわやけをしれ行をやわわきん
らしやて
なつまやかをのきるかをは
をひをとをもものをん
かへいをとををひはなわわ
かるをのくをてはいこやけをの
かををんてきんと世のせをひをく
こをををしへをとを
かをかををきをんちをもものをん

みくにいきとしなるのせんだん
しかまこてきこうしらう又
みのうやまうこうこんちのうこん
ぬしとしわやまとわしとらのせい

又かくこと
やまとつねんかのやなぎんれはやとの
くまもちはうこうあとしもあり
西ゆしくれのひはなあれハ又
かなはやしもしのひとなくいこう
うこうとうこうなきひきをもやわ
かくし

かくんはとくくもんのひとしちるしく
れのひきてもきのせてなるう紀
又ひる
なとおんかきのもしあきんん
くもちれたちるはたるやハみこ
こくんハこうしかてやんねきんはなわ
みくわ又
かこしきうーナハかまもこるの
なくしのきひるとさハなちき
ものへなんかそかくまとるーこんのひ行か
一つとらひこでわくあはハあそんきるえこ

たのこかまとてれこをとわやえて
永なるハおもてのわるっとれかまて
えきとしてとちもあきてしるみ
かへつとこと
わすくくもふかてるときまろなれ
おくもわるいろはときハとわとち
梅るかしまよとちをるとこなしこのみ
くいくをて
いとしかせてれりんゆをーのちちみ
ちるくるこしもきとてしうむ
かへつとみしまとほとなきとと

くせなるやありをし
かのなててしくはるあるへ
ちるよもわとわんかきこしなれ
うこしこみいるるみちあんとれりな
ちるよかいんあまるもわなわしまきて
なしこなし
いまなるんまつるへハまつといて
いちへるくしてれきつきみ
かへつとの
うこせとこと次もわとるよ
しまうの所くなしとこそぬれ

かしせかて
さもこそかなるとのうらいたしかなち
せしーらん、こゆるまつもあわせか
かんてとと、
ちとせ梅ーまんもこそあれたるく
こえてはうつしなすやさはうま
やしをあるあやしなてしとをとおもう
あ、さほとよやる
梅ーうせよたきても物をなりよう
大うこ入りるみこ乃ちつんるみ
かーそしやわ出るにきこゆるさ人ハきよ乃

しをとたんてかんとてしてしてはたい
出るえるこよたあ出るるちわ人ていれ
うみといひて
つうれりよ人かるなてハんなせやを
なりけきのえるこよやまるあるる
みとせいんりとこうあるとなく
てるるゆきみうひ洋てやわたるをの
乃たいこちたをみれてあとひよよ
をのをくさみとしたるほとーく
れるるひよハなわつよきわあをのを
けりようせたくんよようををしてい

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

佛名ハ[illegible]書ノ後カヽレハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十五日ほとハなきこと[illegible]平家ノ[illegible]

[illegible]

[illegible]

四文ハ清祓ノ日よりくよかりけ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やし春かへし給かてもしよ
袖乃いろかとける春を志ほてて
こゝをよたてゝ乃ふれへぬまつ人
なついしの乃ん乃くわまのもゝろ乃いろ
いとゝおもてゝとゝきこえ給ふ人をも給ふ乃をれを
ねまきぬよあはれもゝろもしきり
う乃ハをしはれ失れ者と祢ハ
えちぬくゝとかしうきるもゝろくを
ゝよかきてかてゝ乃ほわてえも給をれを
えちぬくゝの乃らゝ乃ほゝてえまゝ久ハ
いくよ乃くし乃れうしうほし

ある人かをゝ乃はゝ乃ゝ乃ゝ乃

梅ゝくさのなかにもなほ志ものこ
わさちゝこいのいろよりもこゝろ
をぬるこのうをこゝろ
ゝもきる耳
よろこびよをよそにみゝなれこゝ
きゝなれしよろこびよそひなくし
やとりのやへむぐらをやまとせ給
ひきるよ
やとれうこのうをはさらし炭屋
とへやをれりふやまみき乃花
ゝかゝれたちのくよれかゝにてゝるを

なうわやしきるひなのうるひうし
きれハゝれゝかゝ乃まをわやをくつ
ひゝくあれかゝ乃まをわやをくつ
かゝるけうしわまつをこゝれ
かゝし
ゝ和やしるかゝゝときけハきゝゝ
わりてる神乃なよこそハわれ
学る御乃えるよわゝいをい
ひゝやゝの御のいゝはほゝくをを
ゝる学ハ学ゝくをもわゝなん
学れをのゝくしゝやゝ於のゝわやゝ 給よかゝ

て

きつねやたぬきやたぬきに待てもどうぶハ
ちゝめもなきうこるこなるあん
さひしくのかへつてとなるきんハ時をう
さとたちうてつきをいうたんて
やひちくさわつきをいうたんて
をちちちけきよかへさるあん
なとかへつてすせさわきんて

又

さかよのいうなるんきをみさるも
さちうちやもの天るをきを

ぎくてなとをとゝまえなき中あた
きしよわなるうさもかれきゝ
かへて

をゝしよしのきにれわとはちうきわ
たまんたまはまはきゝうまよ
さ祢ゝいのゝ湯の佐よわて佐をしてきゝ
給いて小わよ地れわしをるほのとなる
をし

かしてきゝたちうさよきをきのゝ
なをちうて天ちさと乃山乃かひなき
かへて

かしこきせんさいなるもなれも
ちきわとしわやれ人のきこゆく
かへつさとしるとをわやうちせいをや
きてまろこをけよさて
うちそちきこゆりえよまるこをけ
まろハ人をけるみをとよをちり
ろうのさまいてをもちハしや
うせうはあをのをもちハしや
かりひしうをわやまつをうなん
かへし
えつせうはをんなりわさきよりみハ

こきそよをるえとやなりをん
かへつをるをりわせねをものあわきれを
かりわとえんををえんをるさかあ
いとをへ尼のをくもあるかれ
七月七日
ををみうにけさをくいをつゆをも
えさをすをきをえてやをん
こんハわしをん
をろわりわしやそをんなをる
なをを記るものなくさわよをん
にうたうかへ中納言をあまをさんを和尚のむをを

とゝとゝれくさまひよみをる乃ち訪けのいとゝしを
ひてゝゝてくさまへ（ときれハ世をよかうわ
て

かけて見しを濡も世をえの訪け草
みよくよみてきをよひを物語
女院ハまきとゝねるよれりまり杉わハ酒か
こなをを給をるさをきをのよをちを乃
ゝをまいみを給かて
くをまをるををのう次ハわ孫も
くらをれうへの歌よるなん
かゝし比世れをの世をちををまいりを給へ

ゝをれを
かをうわもをひやハ志作るほをき次
を世世をちをのうくよをわれ
かへし
世をちをみれをわをれなをわをを志ハ
をつえをくてハををねをををき
小一条れ大ねりつよかをりをるよふのうくを
うをりををかをせをてまちきこへ給ひをるよ
雨いをうをわをれをえおををねほをよをい
しむ毎いをうをわをしハえかををせねねをを
いしむををうををつをををかほをををきこへ毎を

ひときるかへつるものよ
ねぎ作り高しきえちはすわかよ
まゝきこえとをとかもそるかん
中ねのあるよくとうわ給よかしそまつ
おさうきれて
ちちを家ふきて出せたこ屋にも
やをおねたゆとかをねしつある
かへし
ちちをにも半ばおよとこねしすう
高ハくをおきやとうくきわ
わし半の人てかへつと給かて

下ノ下二十九

とのうれ給てれちうよ人わへしをとこ
え給ひきれて
いさらハいうなるこまうなるをき
ときあねうさとのれわしえを
うきわるせようりて
うの花のさうなるへし山さとり
衣もちほるれつとえゆれて
ほゝきく
ほゝきくいまそさとる色とる
ようにあるよへやきゝおん
あやめくさ

あやめくさきつの月きと堤をぬれて
孫をきりてこそうつもりよきれ
ほるる
さゝくれやこうきやとけゆきさし
かもてるまてもてらそほるる
やしこなり
さきよきるえるうわせハもこなも
のやけき名をやのこさしまし
かやり火
あやなくやとけるやり火けそめて
しをれしもしりこゝをさけほる

下ノ下三十

花ときまゝ孫きもやまぬ山さとよ
くらうきりかくめほるかれ
こゝをとめまさ名ほふ門るよ千部の経供養
をるよおハしてかへ給よれのやのくをる
いとれたし話うわをれハくふまもきいれ
てかへ給よ
ゑきこうるとはきのゆよけきはば
いさとのくえをうよるさん
こゝをうくへうまけワさとれほくてきろう
孫のうわワをうをして院よゑてまろんと
ちゆよこうけようさんかて接改めくまわ

うしきこえさせ給ふりきれて
ちよもるよりちかへつとたてやまみれ
こゆるようつるしらわれもくなわ
傍のところよ山里よなるわ出る女わほと
やきぬたなるよ
えこひて行てまつわやほきぬ
いまそ山へをなきてもくなわ
こ乃ゑハ寛和二年会よわ法作舟
よ乃つとくるもこころ
ゆるつ海ハわ代舟こそあつとき
のるを出てもこきてきるかな

トソト三ト

せミ

れてるとりよせ代てこゑきれわ
いまうとしわきをとるわる

ふた草

こまやてる人やるとまほる
ちひてのミまぬ花のなくさ

こい

かりひたくこひたくハ行わ出る
ゆめをさめてハくやしかわもわ

ふしひ

かをちてあまこに出て代たるわ

其中書屋

ちきりそめきんちよそをそなき
てゝろゝねやとゝろゝハなのまにいさけわ
賀乃ゝ分ハ月記よわれハかゝと

蜻蛉月記下之下 終

寶曆六子十二月

大坂心齋橋淡路町角
安井嘉兵衛再板

ラ下三下二